

名もなき物語

かまたん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある3人の物語

目次

名もなき物語	1
出会いは唐突……だったりしなくもない	17
反省はして……いなくもない	34

名もなき物語

——そこは「牧歌的」という言葉が似合うような、青々とした草が生い茂る草原だった。

空はその草原を称えているように爽快な青空で、強くもなく弱くもない、ちょうど良い陽光をこの草原にもたらしていた。

周囲には草と軋々とは得ている小さな木だけ。少し遠くにはいくつか村を合わせたような小さな町はあるが、その喧噪もここには遠い。

生き物もそう多くはない。木の洞に小さなリスたちが巣を作っているか、気まぐれに小鳥が空を飛び交い、枝にとまって少々羽根の疲れをいやしている程度。

……いや、その草原には、一人の男が寝転がっていた。

男というより青年と言った方が良いだろうか、それとも少年と言った方が良いのだろうか。まだ第二次性徴を迎えたばかりといった様子の、青年になりかけた少年。瞼を閉じている所為で目の色は何えないが、黒髪に少し黄色がかった肌、その顔だちはこの辺りでは見かけない、モンゴロイド^人の特徴だった。

袖をまくった白いワイシャツと、黒いストラックスは平均に比べれば少々筋肉質な体を

包んでいる。それは鍛えているというよりも、肉体労働に従事していたので太る事はなかった、程度の筋肉ではあるが。

青年は何をするわけでもない、ただ目をつぶり、気持ちよくそよぐ風を肌で感じ、寝る訳でもなく、思索にふける訳でもなく、強いて言うならば「今日の晩御飯はなんだろうな」位の事しか考えていない。

それはそうだ——全身全霊でゴロゴロするというのは、こういう事なのだから。

「……働きたくないでござる」

……こんな所で何を口走っているかと思われるかもしれないが、もはやこれは彼にとつては口癖のようなものだ。

働きたくない。

何もかもを投げうち、自分の精神にあるありったけの何かしらのエネルギーを使って放った言葉は、そんな自堕落な言葉だった。

もつとも、現在彼は無職である。

そもそも、住所すら不定である。

まさかこんな見知らぬ土地で自分がよくニュース番組に登場する「住所不定無職の男性」になるとは思ってもしなかった。思つてなるものでもないのかもしれないが。

「こんな爽やかな場所で何を口走ってるんだい、○○」

不意に声が聞こえて、青年になりかけた少年——〇〇は億劫な気持ちをも何とか振り払って目を開ける。

紅い。

全身紅いコートに包まれた、青年が立っていた。

髪の毛は、この太陽の光を具現化したような金髪。

眼の色は、この草原を凝縮して出来たような翠色。

物々しい留め具などが沢山着いている紅のコートだけが、この牧歌的な印象を破壊するようなパンクなものだった。

まあそうは言っても、牧歌的という言葉に文字通り弾丸をぶち込めるような代物を持つている人間なのだ、今更そんな所を突っ込んでもどうしようもない。

「……なんだよ、邪魔するな。今俺は「何故人は死に、生きるんだろうか」という哲学思想的に大事な問題に思いを馳せていたんだぞ。思索の邪魔をするなよ」

「その結論が、「働きたくないでござる」かい？ 随分面白い言葉が飛び出てきたもんだね、僕びつくり」

「大事だろう？ 働くという行為はそもそも人が勝手に広げていった、言わば「余計なもの」だ。それを否定し純粋に生きる事を享受しようという考えの何が悪い」

「でもこの社会システム上、働かないと君の大好きな本も読めなくなるし、それ以上に大

好きな女の子をデートに誘えなくなるけど、それでも良いの?」

「良い訳がない。だから働かなくても本を読み、女の子とのラヴを育めるかどうか、という問題にシフトした」

「素晴らしいね、極まった怠け者だ」

「お前だって似たようなもんだろう? 人間、のんびりこややつて青空を見て生きて行けたならば、お前の嫌いな「争い」ってやつもなくなるぞ?」

「それは……悪くないなあ」

くだらない会話の中でも、〇〇と青年の顔には笑顔が絶えない。

2人とも、常に笑顔を絶やさない男たちだった。

青年はひとしきりウィットに富んだ会話を楽しむと、そのまま青年の隣に寝そべる。

彼もまた、このようにのんびりする時間が好きな人間だった。それを〇〇は当然の事だと思っている。

何かに思い煩うことなく、のんびりと空を見る。

これが好きではない人間がいるならば、もうそれはどうしようもない。働く事をプログラミングされた機械か、何か理由を引っ付けないと気が済まない理屈屋だけだ。

「彼が探してたよ、君が調べ物を手伝わないからって。相も変わらず、眉間に皺を寄せてさあ」

あれじゃ、雨が降ったら川でも出来るんじゃないかな、眉間に。などくだらない事を言う青年の言葉に、○○は顔を顰める。

「あいつは……なんでそう俺を働かせようとするんだ。俺が役に立たない事を知っているはずなのに。」

俺はあいつと違つて魔術なんて奇妙奇天烈な技術体系を把握している訳じゃないし、お前と違つて科学に造詣が深いって訳でもない。スマートフォン熟练操作にすら手古摺る俺だぞ?」

「その「すまーとふぉん」がどんな機械かは知らないけど、君はサボる天才だからね。三日前の事、忘れたわけじゃないだろう?」

彼にさんざん『自分の部屋くらい掃除しろ。良いか、私が言っているのはあくまで最低限の事だぞ?』なんて言われたのに、自分の部屋に埋まっていた読みかけの本を発掘し、それを読み込んでいる内に一日終わった事」

「あく、あの時は怖かったなあ……『働かざる者食うべからずだよマスター。それとも君は、古代インドの修行者のように、断食苦行にでも挑むつもりかな? それは良い、これで少しは君の「怠惰」と「色欲」の煩惱もきつと消えてくれるだろう』なんて皮肉言っちゃつて。」

「あいつ、もう口から皮肉しか出ないんじゃないか?」

「眉間に山と谷が出来そうだったよ」

青年はそう言いながら、さも可笑しそうに笑う。

○○からすれば全然、全く、これっぽっちも可笑しくないし笑えないのだが、他人から見ればそうなのだろうとも思っている。

だから何も言い返さない。

○○は大人なのだ。

「……なあ、なんで俺なんだ？」

ふと今思いついた。

そんな感じで○○が口に出した言葉は、ここに着いてからずっと思っていた事だった。

青年は、それに何も答えず、困ったように笑みを浮かべるだけ。

○○は、それに構わず続けた。

「なあ、なんでだ？」

俺はお前らとは違う。剣術も、銃も使えない。使えないどころか、今までの人生で触った事すらない。

魔術や、行き過ぎた科学技術の知識もない。勉強苦手だし、生憎、中学校の必須科目じゃなかった。

戦っている時の指示が出来る訳じゃない。戦術眼なんて日常生活で使わない機能は、お袋の胎内に置いてきた。

それどころか、まともな事すら出来ない。昨日は皿洗いをしている最中に皿を割ったくらいだ。

……何も出来ない俺が、お前らの主ときた。何故なのか、理由はさっぱり皆目解らない。

説明すらなく、ここにいます」

何故、自分なのか。

○○にはまるで理解できない。

○○のいた世界には、もっと呼ばれるべき人達が溢れていた。

屈強な戦士でもいい。

思慮深い賢者でもいい。

指揮が出来る軍人もありだ。

もしくは、家事が出来て皆を癒せる可愛らしい乙女だって選択肢としてある。

……何故、

戦えもせず、

知識もなく、

戦を知らず、

癒しもせず、

ぐーたらで、「皆でのんびり日向ぼっこするのが夢。あと女の子って世界の宝だよね？」と公言するような、自分でも恥ずかしくなるようなダメ人間が選ばれたのか。

こんな、

《世界を救う》なんて大役に。

自分にはもつたいないほど強く、思慮深く、戦いを知り尽くし、ついでに家事まで出来る二人の従者まで付けて、わざわざ。

……思い当たる節がないではないが、それは〇〇も流星石に「無いな」と思っている。

「……それは、「たわけ。そんな事を考えている暇があるなら、少しくらいこちらの手伝いをして良いと思うが？」——やあ、よくここが分かったね」

金髪の青年の声に重なるように、凜とした声が草原に響く。

姿を見れば、これもまた青年だった。

髪の毛は、色素を感じさせない白髪。

眼の色は、鉄を製錬したような鋼色。

浅黒い肌は異国情緒があるが、顔つきは〇〇と同じアジア人だ。

普段は黒いレザーアーマーの上から紅い外套というパンクな恰好をしているのだが、今は黒いワイシャツに黒いスラックスといった普通の出で立ちだ。

きつと干しているのだろう、この家事大魔神ならばやりかねない。

「〇〇の考えている事など、そう難しい事ではない。ようは野良猫と大して変わらない」
「……猫に生まれ変わりたい」

「阿呆が、そんな事を言うくらいだったら今後の方針でも考えろ。植物だってに二酸化炭素を吸い込み酸素を吐き出し、温暖化に抵抗しているというに……君は酸素を吸い込み、二酸化炭素を吐き出す事しかしていない。他人に迷惑をかけている分植物以下だ」
「よくそんなポンポン悪辣な皮肉が出てるもんだ。その辞書どこで売ってるの？」

「生憎非売品だね」

いつも通りの会話、先ほど金髪の青年としていたものと同じ。

先ほどと違う事と言えば、片方……白髪の青年の顔は、眉間に皺を寄せたしかめっ面だという事くらい。

「……珍しく真剣に考えていると思えば、そんな益のない事を考えてどうする？」

「ここに何故お前が呼ばれ、従者として我々が呼ばれたのか。そんなのは呼んだ人間に

聞いてみなければ解らないだろう。

しかもその人間の姿も何も解らない。お前がただ「世界を救え」と言われたという事しか手がかりはなく、何からどう救えば良いのかも解らない。

正直、考えても無駄でしかない」

「うわー、僕が言うのもなんだけど、結構遠慮がない！」

金髪の青年の苦笑混じりの言葉を、白髪の青年は鼻で笑う。

「こればかりは取り繕っても意味はない。」

解っているのは——」

白髪の青年が、○○○の眼を覗き込みながら言う。

「私達がここにいて、私達はお前に従う。」

そして君は……君自身が考える程、悪い人間ではないという事だけだ」

ただそれだけ。

それだけなのだ。

「……それで、良いのか？」

俺みたいな奴に従って、良いのか。

そういう意味を含んだ呟きに、白髪青年は溜息を吐く。

「仕方があるまい。君は私のマスター。それはもう揺るがしようがない。そしてありがたい事に、君は私達に悪辣な命令を下すような屑ではない。

……むしろ、心根は善良なそれだ。それだけは、ありがたいと思っている」

ここで「うわツンデレだ」などとは言わない。

〇〇は、やはり大人だった。

「うわー、つんでれだー」

一方こちらは子供だった。

「……お前、どこでそんな言葉を覚えてきた。君が元いた世界でそのような言葉はないように思えるんだが」

「〇〇に教わった」

元凶は自分自身だった。

白髪青年の突き刺さるような視線が痛い。

そのような姿を、金髪青年は微笑ましそうに見る。

こちらからすればいい迷惑だが。

「アハハ、でも、僕も同感かな。」

ここがどこだが解らないし、何故か僕の上位存在として〇〇は認識されている。正直

困った事ばかりだけど……うん、君は良い人だよ。

確かに何の力も持っていないかもしれないけど、それだけで十分、僕らは救われてい
るんだ」

もし、これが。

〇〇が自分達の主ではなく、狡猾で、悪に属すると言っても過言ではない人だったなら
らば。金髪の青年も、白髪の青年も、命をかけてでも抗うだろう。金髪の青年は自害を
選び、白髪の青年はマスターを殺す。

そんな結果を容易に想像できるほど2人は頑固で、真っ直ぐだ。

それをせずに、このようにのんびりを会話できているというのは、〇〇の人徳のなせ
る業だった。

最初に会った時。

金髪の青年と白髪の青年に、〇〇はこう言った。

『俺は、出来るだけ誰も泣かないようにしたいんだ。

泣き顔つてのは、見てて気分がよろしくない。寝つきも悪くなる。

それは、嫌だ』と。

言葉そのものは、まあ何というか、酷い物だった。

これでもかなり原形を留めないほど碎いて顆粒にしオブラートに包んでいる。だがその眼は、

その眼だけは、自分たちの知っている、好ましいと思う眼だった。

ただただ純粹に、悲しむ誰かを思える眼だった。

だから自分達は、彼に従う事を決めたのだ。

唐突で理不尽な主従関係だし、まだ出会って一か月と少ししか経っていないが、それでもこの関係が悪いものだとは思っていない。

むしろ、楽しいものだ。

金髪の青年は——かつて共に旅をした友人を思い出し。

白髪の青年は——かつて食卓を囲んだ家族を思い出し。

〇〇は……はて、何を思い出したのか。

少なくとも、三人にとつて、この関係性と共同生活が悪い物だったなどとは思わず、〇〇が主でなければ等と思つた事は一度もない。

「まあ、強いて言うならば、家事手伝いをしっかりこなして貰いたいものだがな」

「あ、それは同感かな。〇〇がサボると僕にお鉢が回ってくるから」

「……あれ？ 主つてもっと尊重されるもんじゃない？ 扱い雑じゃね？」

「まあ、○○だから「ね」「な」

「お前ら俺が一瞬感動してたのに何なのそれ」

じゃれ合いのような会話は、本人達も楽しそうだ。

金髪の青年が、ゆっくりと起き上がり、立ち上がる。

○○もそれに倣つて、立ち上がつて服についた草を払つた。青臭いが、いい匂いだ。

「さて、そんな話はどうでもいいとして、そろそろ夕食の準備をする、お前らも手伝え」

「はいはい……ちなみに、夕食は何だい？」

「ふむ、良い魚と、日本米と、酢が手に入ったからな。寿司でも作ろうかと思つている」

「oh! SUSHI!!!」

「なぜそこだけ英語なんだ、さつきまで普通だっただろう」

「あはは、何となく？」

2人の青年が歩くその後ろ姿を、○○はじつと見る。

……○○には隠し事がある。

従者がつけられている理由は解らない。

だが、それが何故2人なのかは、知っている。

——自分が憧れる存在だから。

かつて尊敬し、憧れ、自分もそうありたいと願った存在。

自分の中の「夢のカタチ」。その起源である2人がここにいる理由があるとすれば、きつと自分が無意識に彼らを選んだのだろう。

……これをもし、2人に知られれば、2人はどう思うだろう。

自分達が偶像、物語の登場人物だと知って嘆くだろうか。それ以上に、〇〇は詰られ、嫌われるのではないだろうか。

そのような恐怖で、何も言えなかった。

もし、これを伝えられたならば。その時、〇〇は本当の意味で2人を信用できるのだろうか。

「?」おい何をしている、〇〇。とつと来い。魚の鮮度が落ちる。

氷水に漬けてあるとはいえ、生物だからな」

「早く行くようSUISHIが待ってるよ」

少し先を言っている2人が、こちらに振り向いている。

金髪の青年——ヴァッシュ・ザ・スタンピード。

白髪の青年——英霊エミヤ。

2人の「正義の味方」の背中を追いかけて。

とある伝承。

本にすらならず、社会にとってはマイナーだ。

普通の人は誰も知らない。

しかし一部には、必ず覚えている人間がいる。

彼らの偉業をたたえる人間がいる。

そんな3人がいた。

無数の剣を生み出し、操り、誰よりも人を守り続けた男。

必中の銃を振るい、前に出て誰よりも傷ついた男。

そして……何の力も持たない、しかし誰よりも、多くの人の涙を拭った男がいた。

——これは、そんな3人の物語だ。

出合いは唐突……だつたりしなくもない

駅のホームというのは、時代、また世界を問わず賑わうものだ。

そう大きくない街の駅であってもそれは例外ではない。特にこのラインバウムという世界は空路での輸送手段がないため、この鉄道が、物資輸送の拠点となっている。よつて、その荷を受け取る者、さらに別の場所に搬送する者、乗客として降りる者、乗る者によつて喧騒は賑やかに響いていた。

その中に一人、男が立っていた。褐色の肌、白髪 of 髪、体付きは見る人が見れば武人のそれだと分かるだろう。

英霊エミヤ。

とある人間の従者をしている男は、いくつかのトランクや荷物を足元に置き、イライラと周囲を見渡していた。

その隣には、トランクの上に腰掛け近くで売っていたホットドックをパクついている

男がいた。金髪の髪、翠色の目、無骨な紅いコートを身に付けている。

ヴァツシュ・ザ・スタンピード。

彼もまた、エミヤと同じ人物に従者として仕えている。

「ねえ、エミヤ。そんなイライラしたってしょうがないじゃないか。

ここは鉄道がメインだろう？

1時間や2時間乗り継ぎの列車が遅れているのなんて、気にしたら始まらないよ？」

君も食べなよ、美味しいよとホットドックを差し出すが、エミヤはいつも通りの颯めっ面で手を振り断る。

「……ヴァツシュ。君は私が列車が遅れている事に苛立っていると、本気で思っているのか？」

「それ以外に何があるの？」

「決まっているだろう……マスターがトイレに行つてから30分も戻つてこないから私は苛立っているんだ」

ヴァツシュの適当な返事に、エミヤは頭痛を堪えるように眉間を指先で揉む。

彼らの主は、この横で美味そうにホットドックを食べている従者仲間と同じく、目を離した隙にフラフラとどこかに行き、何か厄介事を背負ってくる天才だ。しかもその間どこで行動しているのか分からない。

離れる時は一言言伝でも何でもしてくれというエミヤの言葉を「……出来るだけね☆」とアホな顔で言ったので、あの時は普段は1時間の説教が3倍になった。

最初に辿り着いた小さな町で路銀と必需品だけ確保し、自分達がなぜこの世界に呼ばれたのかを探す旅に出たのは、ほんの昨日だ。

どこか目的はあるものの目的地はない旅だ、取り敢えず情報が集まる首都に行こうと決めた道中、列車の乗り継ぎでこの街に辿り着いた。

自分達が最初にいた時よりも規模が大きく街だ。

きつと自分達のマスターは好奇心を抑える事が出来ないだろう。そう思い最初に段階で嚴重に注意した。マスターは雑な返事だったがちゃんと頷いたので了承したと思うが、それでも心配なのは変わらない。

エミヤも、相当おかん体質だ。

そうヴァツシユは思うが、ここで言えば苛立ちをこちらにぶつけられてしまうのではないが。

「ほら、きつと『大きい方』なんだって」

「……君は食事をしながらよく言えるな。というか、そのホットドックはどこで買った。君にはそれほど路銀を渡していないんだがな、マスターと同じく」

2人はどんな無駄遣いをしてくるか分かったものではないのだ。金の大半は自分が

管理している。2人に見つからないような場所に隠してだ。

「ああこれ? さつき露天のおばちゃんと話していたら存外仲良くなっちゃってさ!

ツレがケチだつて言つたらいっぱいくれたよ、ほら」

横に置いてあつた少し大きめの紙袋には、先ほど食べていたホットドックが紙に包まれて入っている。紙袋の容量を考えれば、一個や二個ではきかないだろう。

相変わらずの人誑しだなど思い、エミヤは苦笑する。

「で? そのケチなツレというのは誰の事かな?」

「さあ誰だろうねえ……ん?」

お互い悪戯少年のような笑みを浮かべていると、誰かがこちらに近づいてきた。

おそらく、5歳ぐらいの少女だ。人見知りをしないのか、大人の男性（しかも他者から見れば見るからに怪しい2人）に躊躇なく話しかける。

「えつとお、うあつしゅお兄さんと、えみやお兄さんですか!」

「——そうだが、君は?」

エミヤは先ほどの皮肉げな表情を消し、微笑ましそうな笑顔で答える。

「わたし、エミイ! お兄さんたちに、でんごんがあるの。ますたーからつて言えば分かるつて、お兄ちゃんいつてた!!」

……どうやら、彼女は伝言役らしい。

「穏やかじゃないなあ、わざわざ伝言なんて」

身構えるヴァツシユと、真剣な表情を浮かべ、良い？

良い!?

と言わんばかり

に落ち着かない少女に頷くと、少女は笑顔で口を開いた。

「あのね、『このトレイユってまちにオレ、きょうみしんしんだから、ちよつとかんこうしてくる、れっしやのじかんまでにはかえるから、☆!!』って」

なんて事はない。

ある種の脱走宣言だった。

「……っ！　っ!!」

「え、エミヤ落ち着いて、血管切れそうっていうか顔怖いから」

必死で俯き表情を隠しているエミヤの方を必死でヴァツシユは叩く。

こんな所で大声を出して良い訳がないし、百歩譲つても目の前の子供が泣く。

「まだあるよ！『ちよつとおこづかいもらいました、使わなかつたらかえすね!!』って!!」

「おこ、づかい……まさか！」

エミヤは顔を上げ、慌てて自分のトランクを漁る。

1番隅の裏地に穴が空いている部分。そこに隠した路銀を漁ってみるが、

「……減っている」

今朝確認した数より少し少ない事を、エミヤの繊細な指は確認した。

自分がトランクから離れた時間はそう多くないし、その間はヴァツシュが近くにいる。ヴァツシュを睨みつけるが物凄い勢いで首を振っているの、彼はどうやら共犯ではないらしい。

なんとという妙技。

なんとという手際の良さ。

その長所をなぜ普段活かせないのか不思議なくらい鮮やかな犯行だった。

勿論、金額はそう多くはないが、問題はそんなことではない。無断で取ったことが問題なのだ。

「——あのつ、阿呆が——————!!!」

「ああ、あ、怒っちゃった……恨むよマスター」

駅の待合室に、エミヤの絶叫が響き、ヴァツシュの恨み言が小さく呟かれた。



トレイユの街の片隅で、青年になりきっていない少年は、少し粗雑な画用紙にクレヨンで絵を描いていた。

目の前には、完成を待ち望む笑顔の少女が座っており、その周辺には多くの子供、さらにそれを囲むように大人達が興味津々でその光景を見つめている。

「——うっし、出来た。さてお嬢さん、ここに描かれている、将来美人になりそうな綺麗な女の子、だーれだ？」

一通り絵を描き終えて、少年はくるりと器用に画板を回して少女の方へ向ける。

一瞬、少女の目が大きく見開かれたが、すぐに満面の笑みに変わった。

「わたし！ それわたしだ!! うわあ〜綺麗」

そこにはまるで虹のような背景を背負っている、その少女本人だ。クレヨンで描いたにしては完成度が非常に高く、周囲の子供の「凄い」という感動の声と、大したもんだという大人達の感嘆の声が、道に木霊する。

「アハハ、それでは自他共に認められた美人のお嬢さん、これは君にあげよう。トレイユの楽しい話を聞かせてくれたお礼だよ」

「ほんとう?!? ありがとう!!」

絵を受け取ると、「お母さんにじまんしてくる!!」と走り出す少女と、それに付き従う

子供達がその場をかけて離れば、次に褒めるのは大人達だった。

「大したもんだよあんな、クレヨンなんかであんな絵も描けるんだな！　ここら辺

じゃ見かけないが、流れの絵描きさんかい？」

「うーん、ちよつと違うけど……まあ似たようなもんだよ」

昔取った杵柄というの馬鹿に出来ないものだと思いながら、少年は立ち上がり道に座っていたためついた土を払う。

昔絵が好きで友人に付き合って自分もよく落書きをしていたのだが、自分は模写ばかり上手くなってオリジナルの絵はなかなか描けなかつたものだ、昔を懐かしむ。

こんな所で喜んでもらえるなら、嬉しい事だ。

「それより、おじちゃん。見物ついでに、どこかオススメの観光地とかないかな？　あ

と美味しいご飯が食べられる場所。

俺、この街に来るのは初めてでさあ、ぜひ」

——少年は、小さな嘘をつきながら話かけてきた中年の男性に話しかける。

初めてなのは確かだが、ここの事は一応知っている。もつとも、遥か遠くから眺めただけだが、ここで起こった事件の事も。

「そうだなあ、つい1年前は結構な事件が起こって、慰霊碑やらなんやがあるが、若い兄ちゃんが見に行くようなもんじゃないし……そうだ！　美味いって言えば、この街

の外れに美味しい料理を出す宿屋があるんだ！

泊まらなくても食えるから、なんだったら行ってみると良い！」

「——へえ、そいつは良い話を聞いた。で、そこはなんて名前だい？」

少年が聞くと、中年の男性は気の良さそうな笑みを浮かべる。

「おう、「忘れじの面影亭」って店だよ!!」

少年は、ある世界からこの世界に何故かやってきた、こちらの言えば、名もなき世界から来た召喚獣という事になるだろう。

それだけならばこのリインバウムではそれほど珍しい事ではないだろう。だが、実際はもつと複雑だ。

少年の世界は、まあそれなりに科学技術が発達しており、ゲームなどVR元年と言われるほど、進化が進んでいた。

そんな少年の中でも好きなゲームは、「サモンナイト」と呼ばれるゲームだった。

リインバウムという世界と4つの世界から特殊な生き物を召喚する魔術「召喚術」を

基本にして、主人公達が戦うシュミレーションRPGのシリーズ。

もつとも、少年は6つ出たゲームの4つまでしかやっていないし、外伝などを読む質ではなかったたので、このゲームを知り尽くしているとは口が裂けても言えないが、好きではあった。

……だが、自分がこの世界に呼ばれると、どうして思えよう。

しかも、自分が好きな二次元キャラクター2人を従者にして。

ありえない。

ありえないが、実際に起こっている。起こっているものをいくら否定しても現実が変わるわけもなく受け入れるしかない。

……1人で。1人でだ。

ここで2人にこのことを話しても信じてもらえないし、信じてもらえてもどうしようもない。

『へい知ってるか!?』 実はお前ら物語の登場人物で俺の世界では架空の人物なんだぜ!?'なんて言おうものなら大混乱。あの2人だから自我崩壊なんて事にならないだろうが、それでもショックだろう。

自分が架空の存在かもしれないなんて、聞いて気分のいい話ではない。

だからこそ、自分1人でそれを受け入れ、確認しなければいけないことが山ほどある。

だから今回は単独行動なのだ。

……いや、そりゃ一人で子供に伝言頼んでトンスラは良くないことだと重々承知しているし、お金をちよくと拝借したのはちよくと悪いと思うけども。

必要なことなんだ、うん。

「にしても……本当に町外れって、ガチの外れなんだな」

長い道のりで怠くなる足を動かしながら小さく文句を言う。

ゲーム上のマップではそう広く感じず、ステイックをちよつと動かせば目的の場所に着けるのでイメージし辛いがここは現実。

郊外にある宿屋なんて、そりゃ遠いに決まっている。

決まっているが、そこそこ体力があり若いとは言え、遠いもんは面倒なのだ。今だつてもう視界に入っているから何とか動いているが、それでも自堕落な男にとっては辛いもんは辛い。

「……やつぱりエミヤとかヴァツシユに頼んで付き添ってもらえば良かったかなあ」

そしておんぶとかして貰えば良かったかなあ……いや断られるが。

そうぐちぐちと文句を言いながらも、足は止まらない。実際にもう店は目の前――、

「――あ、」

声が漏れる。

画面の向こうの存在。

平面で描かれた偶像なのだからそりや美人だろうなと当時は納得していたが、現実になつたとしてもそれは変わらない。

細く小さな体は女性的、綺麗な白い肌も、淡い桃色の髪の毛も女の子らしい。

絶世の美女……否、絶世の美少女と言つても過言ではないその姿。

そりやあんな可愛い子だったら、皆姫と呼んで慕うに違いない。あれでゲームの中のように性格も良かったら、完全無欠のお姫様。

その姿を見て、少年の足は先ほどの疲れなど吹っ飛んだかのように、スタスタと歩き始めていた。



エニシアは、掃除が好きだった。

料理のお手伝いや洗濯も好きだが、一番は掃除だ。はつきりと綺麗になつた結果が目に見えるし、掃除を終えた爽快感は何よりも変えがたい。

自分がいーダーを務めた戦いは、すでに一年前の過去となつていた。

多くの命を失い危険に晒した首謀者である自分がこんな所でこんな平穏な生活を

送っていてもいいのだろうか、と不安になりもするが、優しすぎるくらい優しい人達は自分を暖かく迎え入れてくれた。

今では、この宿屋兼食堂の二大看板娘と呼ばれている。

自分で言うのは恥ずかしいし、もう一人は「あたしそんなの柄じゃない！」と言って全力で否定するが。

「ふう……今日も、いいお天気」

箒を動かす手を止めて空を見上げる

突き抜けるような蒼。今日も一日、良い日になりそうという予感をエニシアの胸にもたらず、清々しい天気だ。

「ああ、本当だ。さっきまで歩くことばかりに集中していたけど、ここは空が近く感じるね」

見知らぬ男性の声に、驚いて振り向く。

少年が、そこに立っていた。

黒髪に、自分よりも少し暗い色の肌。少年と言っても、自分よりも少し年上のように見える。赤いジャケットにラフな格好をしている彼は、こちら辺では見かけない顔だ。

「……お客様、ですか？」

「うんうん、まあ間違つてないかな」

宿屋か食堂か分からないがそう思つて声をかければ、少年は笑顔で頷く。

不思議な人だ。

多くの人を今まで見てきたエニシアだが、その立ち居振る舞いはとりあえず戦う者のそれではなく、普通の少年に見える。だが初対面なのに、妙に親しみを覚える。この人は大丈夫という安心感がある。

「あ、なら、そろそろ昼食の時間なので、良かったらお席にご案内」その前に、君の名前を聞きたいな」

一瞬。

いつの間にそんなに近づいてきたんだというほどの近さに少年は立っていて、エニシアの手を握っていた。

嫌悪感はないが動揺はする。

「ええつと、お客様、手を「君、お名前は？」え、エニシアと申します、それで手を「エニシアちゃんかあ、いい名前だね。歳は？　ちなみに俺17歳なんですけど、2歳以上歳下だったりしない？」し、しません、手「そつかあ良かったあ、そうじゃなきや口説けなかつた」く、口説つ！」

ぐいぐいだ。

お酒が入ったお客さんに似たようなことを言われた事はあるものの、彼はどうやらシラフなようだ。おまけに妙に押しが強く、跳ね除けるのが難しい。

「そうだよ、君みたいな美人を口説かなくて何が男か!!　　って思うしね。まるで優しく咲いている花のようだよ」

サラツと言った。

恥ずかしげも無く言った。

「え、ええっと、お気持ちちは嬉しいんですけど……私、貴方の名前も知りません」

自分は名乗っているのに少年が名乗っていない。

一瞬ポカンとするが、すぐに少年は申し訳なさそうな顔をする。

「これは失礼。レディーに対しての態度じゃなかったね。

僕の名前はま「エニシアになに手出してんのこのスケコマシ!!」うおげえ!!」

手を離し、綺麗な姿勢で挨拶をしようとした少年は……ちようど真横から受けた攻撃で草むらの中に吹き飛んでいった。

「ふ、フェアさん!?!」

銀髪で、エニシア程ではないが白い肌を持った、見るからに勝気そうな少女が、「どうだ参ったか」と胸を張って立っていた。

フェア。

1年前には敵対し、今は雇い主兼家族のような存在。この「忘れじの面影亭」の主人である。

「うちのエニシアを口説こうなんて百万年早いだよ!!」

「ちよ、ちよつとフェアさん、流石にそれはやり過ぎです!」

いくらエニシアを守るためには、飛び蹴りをする必要性はない。

しかもあの吹っ飛び具合から見ると、相当の助走をつけていたのが伺える……過剰暴力だ。

「良いの良いの、どうせ旅のスケコマシなんだから」

「そんな言い方……」

力こぶを作るように袖をまくるフェアに、エニシアも苦笑いだ。

……それにしても、

「……起き上がって、来ないんですけど?」

飛ばされた少年がいつまで経っても起き上がって来ない。

いくら飛び蹴りとは言え、体重の軽いフェアの飛び蹴りだ。それほどの威力はないと思うが、

「ちよ、あ、あんた、大丈夫?」

フェアも流石に心配になったのか、草むらの中に突っ込んでいる少年の様子を見る為に、草むらの裏側に回る。

「どうですか?……も、もしかして、死ん」

「死んでない死んでない!!　　こんなんですんで死んでたらたまつたもんじゃないわよ」

エニシアの言葉に、フェアは動揺で声を荒げる。

しかし、その後すぐに、呆れ顔で草むらの中から顔を出した。

「……こいつ、気絶してる」

——忘れじの面影亭の朝は、こうして始まった。

反省はして……いなくもない

『やっぱ正義の味方って言えば、英霊エミヤだろ。最近の仮面ライダーよりヒーローだぜあれ』

『否定はしないけど、俺はヴァツシユの方が良いかなあ。あの妄執レベルの不殺の誓いはやっぱり凄いよ。1世紀以上生きたって、普通の人じゃ辿り着けない』

『そうだけど、エミヤは人間レベルでああなったんだぜ？ 凄くね？』

『歪んで後悔しちやった時点で彼は良くも悪くも「常人」だよ。だからこそ良いんだろうけど、正義というより病気だって』

『ええ〜ヴァツシユの方が病気臭いぜ？』

『そこは水掛け論だけど、ヴァツシユは正義の味方というより、もはや仙人だよな。常人には理解出来ないレベルの達観だよ』

『その達観が人間臭いのが良いよなあ。』

人の枠を超えた平和主義を持つ仙人と、人の域を超えた救済主義を持つ病人、か』

『……どっちもどっち』

『異常人なのは相も変わらずって感じだな』

『しかも何が怖いって、多分どっちも個人を見ている訳じゃないって所だよね』

『エミヤは人を助けたいのであってその人を助けたい訳じゃないし、ヴァツシユはもはや人類全体を見ている感じだからね。だからこそ2人とも同じ目的のようできて、苦惱も結果も違ってくる』

『……現実にいたら、両方とも精神病棟入り間違いなしだな』

『否定出来ないなあ……衛はどうだ？ どっちが好きだ』

俺は……あれ？

なんて答えたんだっけ？

目を開けば知らない天井なんていう事は珍しくもない。この世界に来ては尚更だ。そもそも知ってる天井がないんだからどうしようもない。

木で出来た温かみのある、ログハウスのような屋根。

そして見える、女の子の顔。

エミヤのあれは色素が抜けた白髪だ、彼女のそれは陽光のせいかな銀色にも見える。明るい青の瞳は宝石のようで、そんな姿なのにどこか勝負そうな印象がその可愛さを引き立てる良いスパイスになっている。よく見えないがスタイルも良い。大きな双丘は平和の象徴だが、なだらかなモノは平穩の表れだと思う。

簡潔に一言で表すならばこの子は——可愛い。

やっぱり画面の向こう側の世界はあつたんだな。

「……君みたいな可愛い子に顔を覗き込んで貰えるなんて、最高の幸せだなあ。

こんなに顔が近いんだ。このまま俺と熱いベーゼ（深め）とかしない？」

「……懲りてないならもう一発食らわすわよ。今度はその腐った脳みそ揺らしてやるから覚悟しなさい」

「フエア!!」

呆れ顔で辛辣な言葉を投げかけてくるフエアと呼ばれた少女と、それを押し留める桃色の髪の少女が見えて、少年は体を起こす。

ちよつと脇の下が痛い動けない程ではない。

むしろ美少女からの飛び蹴りは業界ではご褒美だ。痛くても我慢する。

「これはこれはエニシア嬢。君が介抱してくれたの？ 見た目通り、優しい心の持ち

主なんだね、ありがとう」

「私には何もないのかしら？」

「いくら俺の心が広くて君が美人とは言え、流石に飛び蹴りをかましてくれた子に素直にお礼は言いたくないなあありがとう」

「躊躇なしか！」

フエアの声を聞きながら周囲を見渡す。

「へえ……こりや、良い店だ」

ゲーム画面では基本的に一枚絵で全体像を見る事は出来なかったし、現実に見ている方がやはり印象が違う。

木で作られ広々とした店内は窓が大きく作られていて、そのおかげで陽光がしっかりと部屋の中に入っている。いくつもテーブルが置かれ大人数でも入れそうだが、少しも狭い感じはなく、むしろゆったりと座って入れられそうだ。

安心する雰囲気。

このような所で宿泊し、朝起きてここで朝食を堪能出来るのであれば、多少遠くてもここに泊まりたくなる。

本当に、少し前まで閑古鳥が鳴いていたとは思えない。

「そりやどうも。全く、あんた2時間も寝込んでたのよ？」

飛び蹴りは……そりや悪かったと思うけど、か弱い乙女の飛び蹴りでそんなに気絶するなんて、鍛えていないのね」

「君が乙女なのは否定しないけど、絶対にか弱くはない」

いくら少年がフェミニストだったとしてもそこだけは否定する。

まるでロケットに縛られた時のような（経験はない）勢いで真横に吹っ飛ばされたのだ、か弱いは流石にないだろう。

「まあ強い女の子つても魅力的で素敵だけだね。お昼時終わったんなら俺とデート「しない」つれないなあ」

まあいつもの事だ。

「なにあんた、女の子口説くのが生きがいなわけ？　　気絶する前もエニシアに言い

寄ってたわよね」

少年の為に用意した水を張った桶とタオルを片付けながら、フェアは苦笑する。

「アハハ、そりや女の子口説く為に男の子やつてるところあるからね。特に君らみたいな美人なら尚更さ」

「筋金入りね……でも、良い加減にしないとまた気絶させるわよ？」

私はともかく、エニシアは慣れてないんだから」

フェアが顎で示した先には、陶磁器のような顔を真つ赤にさせているエニシアが立っていた。

「ああ、ごめん。そういう純情な子も好きだけど、困らせるつもりはなかったんだ」

「あ、いえ、その……慣れてないだけなので、言葉そのものは、その、嬉しいです」

素晴らしい。

恥じらい、自分のほめ言葉に喜んでくれる女性の笑顔というのは、どんな時でも自分を癒してくれる、少年は思った。

「エニシアやめなさい。そいつ多分褒めると調子に乗るタイプだから

ところで、いい加減名前なのだったらどうなの？……それとも、まさか名無しじゃないわよね？」

「とんでもない、名前くらいあるさ

……衛ましろって呼んでもらえるかな。ファミリーネームは嫌いだから名乗りたくないんだよ

少し気まずそうに言う少年——衛の言葉に、フェアは訝しげにしながら何も聞かない。

それでも事情持ちの相手は慣れているつもりだ。厄介な事にならなければ、自分は気にしない。

「そう、マモルね……なんか、シルターン風の名前だけど、もしかして召喚獣じゃないわよね?」

その言葉に、衛は微妙な顔をする。

「うくん、どうなんだろう、微妙な所だなあ。自分にも良く分かってないんだよねエ」

「はあ? 分かってない?」

——そう、分かっていない。

最初についた街で色々調べてみた限りでは、召喚術に必要なものは最低でも3つ。

術者。

サモナイト石。

召喚される存在。

大物を召喚する為にはさらにそこから魔法陣を描いたり、術者も複数人用意したり、大量のサモナイト石が必要なのだそうだ。

ヴァツシユは強力な力を持った自立種。

エミヤは人類の守護者。

衛はそこら辺の一般人。

衛はさておき、2人を召喚するならば其れ相応の準備がいる。

だけど召喚された時は、大掛かりな儀式どころか術者もサモナイト石もなかった。何

もない草原の中に3人で突っ立っていたというのが、この世界にやって来た最初の風景だった。

つまり、自分がそもそも召喚獣という定義に当てはまるかどうかも、謎だという事だ。「うん……そうだ、もし良ければ一緒に考えてよ！　一緒に紅茶でも飲みながら、

さあ」

真面目な顔で思索していたが、その顔もすぐに楽しそうな笑顔に変わる。シリアスは1分も保たないのは、彼らしいと言えば彼らしい。

その顔に、フェアも呆れ顔だ。

「……あんた、飽きないの?」

「全く飽きません!!」

むしろ楽しいですな!!

「そう、私は呆れてるわ……そう言えば、あんた1人で来たんじゃないの?」

「?　何で知ってるの?」

やだ、通じちゃった?

サトラレ?

俺サトラレなの?」

「いやサトラレが何だか知らないけど……さつき、なんか赤い服のヘラヘラしてるお兄さんと、白髪のいかつい系お兄さんが来て、今奥の部屋に通したけど、」

「今奥の部屋に」という言葉を聞いた瞬間、彼は動いた。

近くに置いてあったジャケットを取り、オーブンカフェとして使われているテラスの方に行く。出入り口を回っていては時間がかかる。

逃走経路は単純明快、最短距離で突っ走る。

それがヴァツシユに教えてもらった逃走術の1つの極意だった。
もつとも、

英霊であるエミヤの足には敵わなかった。

「まったく、何故そんな無駄なものを学んでいるんだ貴様は!!」

「いやいや無駄じゃないじゃん逃げるの超大事!」

「大事だが今ここでは大事ではない!!」

尤もな言葉だった。

衛は文字通り首根っこを掴まれ、店の中に連れ戻されていく。

少年はそれほど体が大きくない方だとは言え、それなりの体格だ。それを片手で持っている事に、フェアもエニシアも驚いている。

アーチャーと呼ばれているエミヤは筋力のステータスは決して高くはないが、それはあくまでサーヴァントとしてのものだ。

実際は、十分超人の域だ。

「さて、何がどうしてお前はここに来たのか。何故呑気に、いつも通り女——失礼、女性を口説いているのか、話してもらえるかな、マスター？」

「そ、その前に絞まってる、首絞まってるから」

シリアスになりきれない男——衛が初めてこの世界に爪痕を残した瞬間である。

勿論、これだけで終わったわけではない。

勿論この先は続く。

続きは……また日を改めて。